和田傳全集

第七卷

和田傳全集　第7巻

定価2,800円

昭和五十三年九月二十五日　発行

著者　和田傳

発行者　高橋芳郎

(〒162)
東京都新宿区市谷船河原町十一
発行所　社団法人　家の光協会
電話　(260)三一五一(大代表)
振替東京5-4724

印刷　三松堂印刷株式会社
製本　寿製本株式会社

© Den Wada 1978 Printed in Japan 書籍コード 0393-54607-0301

和田傳全集　第七巻

和田傳全集（第七巻）目次

霜雪　5
牛乳　114
越石田地　133
日露田　144
供養　159
伝説　179
荒れ草　190
貧　209

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

恩 226
菩薩 244
夜水 264
ある篤農家 284
事故のあと 302
無縁さん 323
古帳 345
咲の星霜 366
地蔵 391
解説 赤星虎次郎

装幀　舟橋菊男
題字　久住和代

霜　雪

一章　赤ずきん

一

亀三郎が一生を賭けた心願は彼が十六歳の年、明治十六年の春にかためられたと伝えられている。

それはまた父親の心願でもあり、遺言のようなものでもあった。その年の春先にその父親はなくなったのだったが、死ぬ二、三日前、今日なおむらの語り草になっている伝説を彼はのこしたのである。彼の家はむらでもふるい家の方に数えられていたが、屋敷のほかにはひとかけらの土地もない、それこそ鴉にぶッつける土もないという小作農であった。それも、土地のせまいところならとにかく、相模川右岸のひろい平野で、四百町歩の水田が潮のようにのび、むらの上の丘地にはこれまた三百町歩の畑地がつらなっているのであった。

その頃父親は四十を出たばかりの働きざかりで、しかも長男の亀三郎は十六歳となり、これから十年や十五年は二人男で地響きたてて稼ぐつもりであったところ、ぽっくり脳溢血でなくなってしまったのだったが、死ぬ二、三日前、彼は丘の上の畑から、目の下に眺められる一望四百町歩の水田のつらなりをながめおろしながら、鷺のようにいつまでもたたずんでいたのであった。耕地ではかげろうが燃え、水も温んで、田螺や雑魚をあさる

子供たちの姿も見られた。鷺のようにじッとたたずんでその耕地を見下ろしていた彼は、やがて、手ばなしでおいおいと泣き出したのである。

彼はいつまでもおいおいと声をあげて泣いていた。そこへ隣の喜平次が通りかかったのにも気がつかなかった。喜平次が驚いてそのわけをたずねると、彼はすなおにこのずっと年下の若者に向かい、見な、これほどの広え耕地に、おらがの田は一枚もねえんだ……と言って、またはげしく泣き出した。自作農である上隣の喜平次は、年も若かったので、それには何と言ってよいやらもわからず、そのまま通り過ぎてしまった。このことは二、三日後の彼のお通夜の席上喜平次の口から語られたが、亀三郎にとってもそれが初耳であった。

今日でも伝説となっているこの話は、たちまちむら中にひろがったが、それはどちらかと言えば面白おかしく語りつがれ、亀三郎のような受け取り方はむらの誰もしなかったと言う。つまり誰も格別それに同情をするでもなかったのだが、むらにあっての彼の存在は先ずそう言ったものであったと判断してもいいようだ。

亀三郎にとっては、しかし、それはただごとではなかったのである。その若さで一家の主人となると、彼はかたく決意し、一生を賭けてその目標に向かって突き進む心になったのであった。若い亀三郎が百姓としての生涯の出発点がここにあった。

二

亀三郎がその名を売り出したのは、早くも、その年の秋のことであった。若く、身体も強健で、頭脳も敏捷であった彼は、一家の主人になるとその途端に十六やそこいらの若者には見えなかったと言い伝えられている。

その秋の稲作はよい出来でなく、どちらかと言えば不作の方であったが、さりとて、小作寄り合いをするほど

でもなく、――小作寄り合いというのは今日の小作争議のことだが、――小作人は泣き言をならべながらも定額の年貢を地主におさめてしまった。勿論例外はあって、とくべつひどい田については相対ずくで相談をするというのはあったが、亀三郎はこの相対相談をした組であった。そのことは小作人の側からも白い眼で見られ、亀三郎の田でそれほどならとっくに小作寄り合いになっている筈だと口に出して言う者が多かった。むらでもふるい方の亀三郎の家の小作田は、そのおかげでいずれも中等の田地だったのである。

小作人でさえそう思っていたほどだったから地主がその訴願をすらすら聞き入れるわけがなく、結局坪刈りをして見ようということになったが、亀三郎が名を売り出したというのはその坪刈りの際、刈った稲束を抱えて畦から道に出る途中、目にもとまらぬ早業でもって、その稲穂をちぎっては捨て、ちぎっては捨てたという事のためであった。

坪刈りをしようと地主から言われ、出された鎌を受け取ると亀三郎はただちにその対策をたてた。彼は刈った現場から道路まで出る途中穂をちぎって捨てるためには、現場が道路より遠いほどよいと考え、まんまとその条件に地主を誘致することに成功した。普通坪刈りをする場合は、その田のうちで良くも悪くもない中等の場所を選んでするのであったが、亀三郎は少しぐらい良い場所でも道路までの途中の長いところを選び、その若さで老練な地主をまんまと陥れたのであった。当時一株の稲穂は十二、三本、一坪の株数は五十株が普通とされていたから、亀三郎はその途々約一割の六、七十穂はちぎって捨てる計算をたて、地主のあとにしたがって道路に出ながらそれをやってのけたのであった。それも、用心して畦の上に穂を落とすようなことはせず、稲株の間に、または野良着のふところにたくみに隠したのである。しかし、隠居はしていてもまだしゃんしゃんしていたその七十歳の地主は、これもさるもので、亀三郎のおかしな手つきを目ざとくも見破ってしまったから大変なことにな

った。

ちぎって穂だけは捨てたけれど、その下部の藁草までは捨てなかったから、それを地主から突きつけられて、亀三郎はその道路の上に平蜘蛛のように這いつくばらなければならない仕儀になった。勿論彼の訴願はその場でふいとなり、ばかりか、その地主の中等の小作田は取り上げられ、かわりにあてがわれたのは下田（げでん）であった。筋向こうの長右衛門という律義で真ッ正直な百姓の小作田と入れ替えを命じられたのであった。

この事件はむらを震撼させた。亀三郎の名は一夜にして高まったが、しかし当の亀三郎は、それならばと、早くも次の対策を練っていたのである。知らぬが仏で、そこは若さのせいもあって、彼はそれほどの評判もわが耳に入らぬをいいことにして、たいして気にもしていなかった。一寸しくじったぐらいのことですましていたのである。小作田の入れ替えも、八反のうちのたった二反で、それとて、年貢の安さを思えば大したことではないとけろりとした。

上隣の自作農の喜平次は、その頃から庭にひろげた籾蓆（もみむしろ）に注意するようになったが、下隣の孫太郎も同時にそんな気になり、屋敷ざかいには蓆はひろげぬことにした。下隣の孫太郎も、喜平次と同じくらいの自作農で、これは誰のせいでもなかったが皮肉な家並びであった。

三

それほどの大評判も、わが耳には入らぬから無いにも等しく、亀三郎は存外平気でしゃあしゃあとしたものだった。そんなことより、年貢の減免がふいになったので、その対策を練らねばならぬ最中であったが、やがて彼はそれを立案した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

最初の失敗ののち、このたびはうまく成功した。しかも、それはその回だけでなく、年々成功して、亀三郎はそのため大変得をとることになったのであった。それほどの大評判の真ッ最中にそういうことをやってのけたのは、裏をかくというつもりよりは若気のさせたわざと見るべきであったろう。が、事実は立派に裏をかいたことになり、後年その度胸のほどに人々は舌を捲いた。

減免がふいとなり、他の方法でそれの埋め合わせをしなければと考えた亀三郎は、冬の間に用意しておいた俵や桟俵や結い縄には眼もくれず、新しくそれらを編み出した。当時は俵や桟俵や結い縄は、べつに検査はなく、ただその重量が一貫匁と規定されていただけであった。しかし、この規定は厳格に守られ、俵と二つの桟俵と五本の結い縄とで丁度一貫匁になるように誰もが編み、その手練のほどがまた自慢なのでもあった。

父親と二人で冬の間編んだこれらのものは勿論この規格通りのものであったが、亀三郎は或る地主のところへ納める小作米十俵のために新しくこれらを編み出したのである。というのは、一俵に付き五合、十俵で五升の米を蹴出すためには、一俵の包装一貫匁を、米五合分の二百匁を加えた一貫二百匁のものに編まなければならぬからであった。

それはなかなかむずかしい仕事であった。二百匁重くするために、縄も太く見えてはならず、俵の編み目に増減があってもならない。見た目に見破られずにそれだけの重量をつけるためには、藁をふやしても太くならぬよう力を入れて縄をない、工夫をこらして俵を編まなければならない。しかも、いまになってそんなものをこしらえることが人にわかってはならぬから、昼間はやるわけにゆかなかった。そこで亀三郎は夜なべに、しかも近所隣が寝しずまってからそれをはじめるのであった。いいことにそれは音もたたない仕事であったから、彼は母親に言いふくめ、ひとりで夜半になるまで仕事をした。絶えずおもてには注意をはらい、人が来る気配でもあれば

行灯の灯は吹き消してしまうつもりであった。そして、誰にもさとられることなく、亀三郎は十俵の小作米から五升を抜きとり、その大評判の真ッ最中を平気な顔で地主の家に曳いて行った。

そこで秤にかけたられたが規定通りの目方はあったので、亀三郎は礼を言われながらそれを土蔵に積み込んでやって帰った。

——おれは五升得をして、地主さんにゃ一文の損もさせねえんだから構あことはねえよ。損をするのは玄穀屋だが、なあに、玄穀屋だって損なんかしやしねえさ……。

帰ると彼は案じ顔の母親に向かってこう言った。

——損は買って食う者にかかってゆくんだ……構あことはねえな……。

と、母親も言い合わせた。

この見た目には同じでも二割方重量をつけた俵や縄のつくり方に、亀三郎は益々手練を積むことになり、これを見破る者がなかなかなかった。勢い、二割は二割半となり、三割近くにもなって行ったのである。

人間の慾には限りがない。二割を得れば三割をのぞみ、三割からは三割半と、のぞみはとどまることがない。三割まで得ることにした亀三郎は、次には当然それ以上をのぞむ段取りとなったが、そこで彼は方法を変え、別なことを思いついた。亀三郎まだ二十歳の秋のことであった。

これもまったく亀三郎独創の考案であり、半世紀を経た今日なお「亀三郎のアンコ」という言葉が言い継がれているのである。アンコとは餡で、米俵のなかに屑米の餡を一斗もぶちこむという大胆な方法を彼は考案し、実行し、しかもまんまと成功したのであった。

竹筒を尖らしてつくった刺しというものがどこの家にもあって、それで俵を突き刺して中の米を吟味するのが

慣わしであった。どこの地主も、必ずその刺しで俵を突き刺して米を吟味するのであったが、その刺しが突きささる深さは精々一寸か二寸くらいなものであった。俵の真ん中までは届かないし、その必要もないのであった。亀三郎が眼をつけたのはそこで、彼は俵の丸みや刺しの寸法をはかり出し、俵の胴の真ん中には何を入れても突き刺さる心配はないという見極めをつけると、蓆を捲いて円筒のようなものをつくり、それを俵の真ん中に入れ、その中に約一斗の屑米を入れ、そのまわりに三斗の普通の米を入れてからしずかにその円筒を引き出すという遣り方を考案したのである。夜更けの土間で、戸締まりをしてしまってから母親と二人がかりでそれをした。そして、刺しで突き刺しても真ん中の屑米には達しないということもたしかめた。勿論屑米は軽いので、その分は包装の方で補いをつけた。屑米とは碾(ひ)いて団子(だんご)にするか鶏の餌にでもするよりほかない砕け米や青米(あおごめ)のことで、四斗のうち一斗までそれを混ぜて済ませる得は莫大なものであった。

二十歳の亀三郎は、その米俵を何食わぬ顔で地主たちの家に運び込み、一人の地主の刺しもその屑米の層までは突き刺さらなかったのであった。地主のうちには、小作米を受け取るとその俵に小作人の名前を書いた紙片を差し込む家もあって、亀三郎が坪刈りの穂を捨てたのを見破った老地主もそれをやる一人であったが、不敵な亀三郎は、その方法が、単に小作人を牽制するための形式的なものに過ぎなく、そんなものはいずれは鼠にでも食われてしまうだけのものだとたかをくくっていたのである。そして、それはまったくその通りであった。坪刈りの捨て穂事件以来、しばらく亀三郎は何事もなく世を渡ることが出来、計算すれば莫大な得をおさめることができた。

四

年貢には丸俵のほかに、何斗何升何合という端米がつきものであったが、当時は、地主の家にさえ、さきの老地主のところをのぞいては、一斗桝というものがなく、一升桝しかなかった。だから一斗をはかるには一升桝で十回はかるということをするのであった。

桝でのはかり方というものは、随分いい加減なものとなる。はかり手の技術がものを言い、一斗桝でたった一回はかるにさえ、その気になれば一合くらいは蹴出すことができるものだ。

亀三郎がこれに目をつけぬという筈はなかった。そして、彼のこの桝目とりもすばらしい成功をおさめることになった。秋になると亀三郎は毎晩土間にあぐらをかき、戸締まりを厳重にしてしまってから、暗い行灯の下で、桝をはかる練習に励むのであった。

この技術の秘密は、早業にあった。米を桝に移すに、米粒が横に落ちついてしまう隙きをあたえず、まだ斜めな状態にあるうちにはかってしまわなければならないのであった。粒々が斜めな状態に、しかも充分隙き間のある瞬間にはかってしまうのだ。それから、一升桝で何回となくはかってゆく場合は、桝から箕に米をあける時、桝の底にかならず何ほどかの米を残すという技術も彼は習得することができた。これも早業にものを言わせるのである。その早業は目にもとまらず、桝の底に残すくせに、いかにも底をはたいてしまうような大仰な手さばきで見ている者の目をくらますのであった。それからまた、桝をもつ時、右手の拇指の先をぐいと桝のなかに突ッ込み、その容量だけの米を浮かすという遣り方も、数を重ねれば相当なものになるのであった。

毎晩行灯の下で習練を積み、その技術はわれながら驚くほどのものとなり、見ている母親も驚いた。そして、

最初に亀三郎がこれを決行したのは、小手調べのつもりでか、上隣の喜平次に対してであったが、一斗のうち実に一升をはかり出すことができた。

――すまねえがな、もうあと一斗あると丸俵になるんだがな、この次摺いたら返すから一時貸しといてくれろや……。

と、亀三郎は箕を持って喜平次のところへ行った。

お安いことだとばかり喜平次は承諾し、一升桝を持ち出したが、

――はかってくれろや……。

と、亀三郎は言い、桝を差し出した。

喜平次がはかって、一斗の米を亀三郎は借りて帰ったが、三日ほどして次の殻臼をひくと、彼はさっそくそれを返しに上隣へ行った。

――はかってくれろや……。

と、今度は喜平次が言った。

亀三郎がその時返しに持って行った米は、実は喜平次がはかってくれたそのままを袋に入れておいたものであった。品種も同じものをつくっていたからそれで通ったのであった。

喜平次からそう言われると、よし来たとばかり亀三郎は手練のはかり方ではかった。結果は、喜平次がはかってくれたそのままが、かっきり一升あとに残ったのであった。家に帰ってその残したかっきり一升をにやにやして眺めながら、

――ただ儲けだ……。

と、亀三郎は自信のほどをかためることができた。

この方法で彼は小作米の端米をはかったが、どこの地主でもそれをはかりかえすなどということはなかったから、絶対にばれるということはなかった。いろいろな方法のうちこれは一番安全なものとなり、亀三郎は鼻唄まじりでそれをやることができたのである。

しかし、絶対に安全なこの方法から穴があきはじめたのは何とも皮肉なことであったが、それは小手調べに喜平次を選んだことが抜かりであった。何事にもたんねんであり、地主ほど鷹揚でなかった自作農の喜平次は、たしかに目の前で十回はからせて受け取ったその一斗の米を、たんねんにも、再び自分ではかって見たのであった。すると、一斗が九升になっている。喜平次は狐につままれた思いで、三たびはかって見たが結果は同じであった。彼は解せなかった。たしかに十回はかった筈だったが、すると一回間違えたのかなと思い、それはあきらめたが、何としてもあきらめ切れぬ思いが残った。それほどの米が惜しいのではなかったが、何としてもおさまらない気持ちであった。

人と争うことなどの嫌いな、おとなしい、浄瑠璃などの好きな風流人である喜平次は、しかし、内心は剛腹なところがあり、それが、時に一風変わったことをさせるという性質の男であったが、彼はその何としてもおさまらぬ気持ちを、やがて、はっきりした形で表明した。それは思いきった方法で、一寸誰にもできるということではなかったが、喜平次は亀三郎の屋敷との間のスグ路をふさいでしまったのであった。スグ路というのは、隣り合った屋敷の間にはどこにもあけてある、裏同士行ったり来たりする通行口のことで、屋敷の境は大抵茶の木株か生垣になっているが、かならずその通行口が三尺ほどは何処かにあけてあるのであった。このスグ路を喜平次はふさいでしまい、竹垣を結ってしまったのであった。思い切った遣り方で、それはもう隣づきあいをやめると

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com